

先生たちが体験！

新たな考えを生み出す対話とは？

生徒たちが「対話」によって新たな価値を創造できるように育つには、育て手である教員が「対話」の有用性を理解していることが欠かせません。そこで、ワークショップの企画・実践を営む株式会社MIMIGURIの協力の下、「『対話』によって何が生み出されるか？」を全国から集まった先生方に体験していただきました。「対話とは何か？」のレクチャーから、グループセッション、参加者の振り返りまでをレポートします。

熊本北高校(熊本・県立)
橋口 嵩先生



三沢高校(青森・県立)
尾崎恵子先生



相洋中・高校(神奈川・私立)
斉藤友昭先生



対話のテーマ
高校で育むべき
主体性とは何か？

愛光中学・高校(愛媛・私立)
寺崎仁樹先生



飯南高校(三重・県立)
多賀秀徳先生



大阪高校(大阪・私立)
辻 晃子先生



ファシリ
テーター



和泉裕之さん
(株)MIMIGURI所属。組織・人材開発の企業案件を専門とする部署のマネジャーを担当。ファシリテーターとしても活動する。



渡邊貴大さん
(株)MIMIGURI所属。組織・人材開発のファシリテーター。学校教育におけるPBL・SELプログラムの開発も手掛ける。

主体性をテーマに
先生たちが「対話」を体験

ホームルームや授業など、学校現場では多様な話し合いが日々行われている。何らかの答えを導き出す議論や討論ではなく、自由な雰囲気の中で新たな意味づけを創ることを試みる「対話」とはどのようなもので、そのような場をどうしたらつくれるのか、6名の先生方にご協力いただきながらワークショップ型の研修を開催した。

ワークショップ(以下WS)のプログラムの企画・実践を担当したのは、(株)MIMIGURI。同社は、コンサルティングやメディア・CULTIBASEの運営を通じて、企業や学校・団体などが組織と人の創造性を賦活する総合知の体系化と提供を専門としている。なかでも、学校など教育機関でのWSを多数手掛ける和泉裕之さんと渡邊貴大さんにファシリテーターを担当してもらった。

対話のテーマは「高校で育むべき主体性とは何か？」。新学習指導要領では「主体的・対話的で深い学び」が重視され、また入学者選抜においても主体性が評価されるなど、「主体性」をどう考え、育んでいくかは多くの先生たちの共通の課題になっている。どのような対話が繰り広げられたのか、



図1 ワークショップの流れ

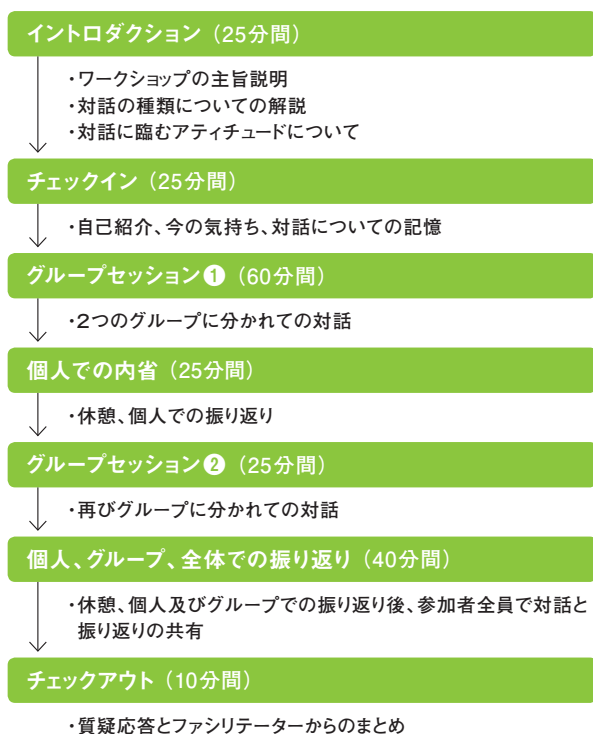


図2 対話とは？



図3 対話に臨むアティチュード



<https://emochan.jp>

「emochan(エモCHAN)」は、職場のおもちゃメーカー (株) KOUが開発した、対話を楽しむ、安心・安全に促すために感情を表明するためのソリューションツール。ウキウキ(喜び)、ワクワク(期待)、ドキドキ(動揺)など8つの感情を色と絵で表したものを、対話するメンバーが使用。リアルな対話用のカードと、オンライン会議用のバーチャル背景がある。

前提となる認識を揃え、
安心な場で対話がスタート

オンライン研修会の様子をお届けする。
WSは全国から、さまざまな実践に積極的に取り組まれている6名の先生方にお集まりいただき、コロナ禍も鑑みてオンラインにて実施。図1のような流れで、約3時間半という限られた時間の中で、対話についてのレクチャーと2つのグループに分かれてのセッションを実施した。
冒頭のイントロダクションでは、ファシリテーターは終始笑顔で進行。安心・安全な場の雰囲気形成に徹してお

り、自由に発言できる空気をつくりながら、「対話」とは何かについてレクチャーした(図2)。
この「対話(dialogue)」の定義は、「あるテーマについて、互いの意見や意図、経験や感情を本音で共有し合い、お互いを深く理解し合っていくためのコミュニケーション手法」だ。対話には相互理解を深める「探究的対話」と、さらに進んで、新たな意味やアイデアが創発される「創造的対話」の段階がある。生徒たちが「創造的対話」をできるようにするために、今日のワークショップで先生たちに創造的対話を目指して体験してもらうことが伝えられた。

対話に臨む際に心掛けたい3つの「対話のアティチュード(態度、心構え)」(図3)が示された。①一般論や伝聞ではなく、「わたし」を主語に語る、②語られる発言だけでなく、相手の背景に目を配ったり、その場で聞いている自分の気持ちも振り返ってみるなど、互いの気持ちに耳を傾けること、③誰かが対話を進めることを期待するのではなく、「私がこの場をつくっている」ということを忘れないことだ。
チェックインでは、各自がこの場での呼び名を表明したり、「emochan」という感情をシェアするツールを使って、今の気持ちを伝え合った。

次ページからは2つのグループ別のセッションの様子を中心に、WSのダイジェストをレポートする。私立高校の先生で構成したAグループ、公立高校の先生で構成したBグループで、それぞれ3名の先生とファシリテーター1名の4名一組で対話を実践した。先生方の個性で冒頭からにぎやかに始まったAグループ、お互いを気づかいながら始まったBグループと、対照的な対話が展開された。参加者の個性に合わせたファシリテーターの介在と、事後取材で語られたグループセッションでの働きかけの意図も、学校現場で対話を進める先生方の参考になるはずだ。

【対話のテーマ：高校で育成すべき主体性とは何か？】

表現しにくい“想い”を外に出すことで 自分たちの言葉を軸に新たな概念が生まれた



斉藤先生



辻先生



寺崎先生



渡邉さん

フェーズ

1

参加者に場を任せ、自由に対話してもらう

お互いの日頃の実践やもっている課題感などを語り合い、知ることで、相互理解が進み
発言のしやすい場になっていったフェーズ。



どなたかぜひ、口火を切ってください

ファシリテーターの意図

…… グループ分け前のチェックインで、Aグループのメンバーは積極的に話
すタイプと判断。私の介入なしでも対話は動くと思い、任せました。

自身の活動と現状のモヤモヤを
吐露する先生たち

寺崎 ▶ 「主体性とは？」には答えはなく、場合によっても変わる。自分自身は育成するために
講義型ではなくWS型の授業をやっている。

斉藤 ▶ 理科担当の私もWS型授業やプレゼンを実施しているが、授業という設定の中で出
てくるものが生徒の主体性かは**正直わからない**。

辻 ▶ そもそも「**主体性って何だ？**」というモヤモヤを抱えている。担当している学校広報に
も生徒を巻き込んでいるが、そこでの経験は主体性につながっていると言えるのか…



ご自身が主体性を発揮した体験は？

ファシリテーターの意図

…… 生徒の主体性を育む取組や具体的な手法の話で盛り上がってきた
ので、主題に戻る方向づけの意味で問いを發しました。

一瞬自身の話になるものの、
再度モヤモヤの話に…

辻 ▶ 広報に生徒を巻き込んだのは自分の主体性だったかもしれないが、テーマを与えられ
て動く生徒は主体的なのか？というモヤモヤは消えない…

寺崎 ▶ 学習指導要領には主体的という言葉がたくさん並び、主体性を強要されている気も
するが、「主体性を育む」の主旨は教師。例えば授業では「問い」を設定すれば生徒
は動いてくれる。**設定が大事なのでは**。

斉藤 ▶ 生徒の主体性のために設定や仕掛けが必要なのは面白い。それについてもっとみ
んなで語りたい。

フェーズ

2

改めて主題に戻る

お互いの想いや経験を語ったことで、主題に戻って考えたときに「自分ごと化」など
共通のコンセプトを見出し始め、徐々に**探究的な対話**になっていったフェーズ。



ここまでの話を踏まえ、「高校で育むべき主体性」とは？

ファシリテーターの意図

…… 先生たちの対話が再び実践の話になりつつも、お互いの経験やモヤ
モヤを開示することで徐々に探究的になってきていました。そこで再度
テーマに即した問いを投げかけて、フェーズの転換を試みました。

「自分ごと化」という言葉を
共通項に語り合う

寺崎 ▶ 今までの3人の実践などから、**「ある設定があったときに、自分ごと化する」**ことが**高校
で育むべき主体性では？**

斉藤 ▶ 寺崎さんの「自分ごと化」は自分にぐっと入り込む感じだが、私の場合は近づくくらい
のイメージで、微妙に違う。

寺崎 ▶ あらゆることを自分ごと化してぐっと入り込むことは難しいので、自分ごと化できる対象
は、人や場合によって違うのかも。



辻 ▶ 生徒自らが世界を広げるチャレンジ精神が、主体性では。その前提には、失敗してもいいんだよ、ということの共通認識があってほしい。それが高校段階で育むべき主体性なのかも。

斉藤 ▶ **なんとなくそれぞれじっくりする言葉が見つかった。無理にひとつにする必要はない**かな。

【グループセッションから全体に戻り、個人での内省】

一旦、全体に戻り、ここまでの対話について個々で内省。「ここまでは、自分の中にあつたものを場に出している状態。ここからは、今感じ始めたことを場にポツンポツンと出す。そんなこともトライしたい」と和泉さんから伝えられ、再びグループに戻っての対話を再開。

フェーズ

3

自分たち自身の問いかけから、新しいコンセプトが生まれる

この場で生まれた「問い」やモヤモヤを場に出し、対話によって探究していく中で、自分たちで生み出した言葉から新しい意味づけが創り出されたフェーズ

設定がある中での取組は、本当の主体性と言えるのか？という「問い」が生まれる

寺崎 ▶ 設定された「問い」はあくまで人（教員）の設定であり、生徒自身の「問い」ではない。
課題が提供されたものか、自ら決めたものなのかは大事では？

辻 ▶ 提供された「問い」からのスタートでも、思考することに興味をもてれば良いのでは。その繰り返しから将来的に自分で「問い」を設定できるようになればそれが真の主体性。

斉藤 ▶ 筋トレのように、生徒が「問い」づくりを練習することで上達していくというのはわかる。でもスタートとなる教員側からの「問い」づくりが難しい。

主体性を発揮すると言うといかにも自分自身の中から出てくるように思えるが、実際には無意識のうちに誘引する何らかの力学があってこそという説もあります

ファシリテーターの意図

…… 次への転換点になりそうなきや、逆に対話が同じところで停滞しそうなどときには、ファシリテーターから話題を提供するケースもあります。

話題提供によって、参加者の内面に変化が

寺崎 ▶ 人文科学担当の立場では、人間が社会的であることは自明。同じ人間でも別の場面や異なる時代では違う主体性を発揮する。渡邊さんの「誘引」はそういうことかなと。

辻 ▶ 「誘引」は生徒会の取組でもよく使う「サポート」ともつながり、じっくりくる。モヤモヤが少し晴れた。

斉藤 ▶ 私はモヤモヤが増してしまった…

斉藤さんのモヤモヤを、言葉にするのは難しくても外に出して表現できますか？

ファシリテーターの意図

…… 対話では言葉にならないような自分の思考や感情を外に出して、みんなと分かち合うことが大切です。まず表現してみて、それから意味をみんなで見つけ合う対話をしていけば良いのです。

モヤモヤをとりあえず表現してみる

斉藤 ▶ 例えば今自分たちは「主体性は何か」を主体的に考えているが、それはこの場が設定されたから。ある意味、編集部に**踊らされている**とすると、**主体性はどこにあるのか？**

斉藤さんは自分で踊りたいと思っていますか？

ファシリテーターの意図

…… 斉藤先生が「踊る」というパターン化されていない言葉を発してくださったので、それに対する意味づけをこの場で進めたいと思いました。

「踊る」という新しい言葉の発出から、一気に対話が展開

斉藤 ▶ そうか、踊りたいと思えば踊ってもいいんだ！

辻 ▶ 踊らされたらいいじゃん、と思う。

寺崎 ▶ まずは踊りを覚えればいいと思う。そのうち自分から踊りたいと思える踊りを見つければ。

斉藤 ▶ 我々は日々生徒に「踊ってみな、踊ってみな」とやっているが、踊らない生徒もいる…

寺崎 ▶ だからこそ、**踊りたくなる音楽をいろいろ試してみる**ことが大事なのかも。

全体振り返りへ

【対話のテーマ：高校で育成すべき主体性とは何か？】

ファシリテーターが場を手放した瞬間に 対話のピッチが加速、アイデアが創発された



尾崎先生



多賀先生



橋口先生



和泉さん

フェーズ

1

ファシリテーターからの問いでそれぞれの想いを表出

参加者のタイプに合わせてファシリテーターが丁寧に進行しつつ、
先生方が過去の経験や想いを語り、相互理解を深めたフェーズ。



主体性について思うことは？
ご自身が考える主体性とは？

ファシリテーターの意図

…… 周りへの気づかいを非常にされる先生たちだったので、儀礼的な雰囲気から「対話」へと発展させるために、一旦私から「問い」を投げて、場を温めようと思いました。

ファシリテーターからの問いに、
徐々に心を開いて話し出す先生
たち

橋口 ▶ 高校時代の自分には主体性がなかったので生徒の主体性を育む場をつくりたい。ICT導入のバタバタで大変な経験をしたことがきっかけで自分は主体的になってきた。「自分からやる」ことが主体性。「とりあえず動いてみる」ことが大事。

尾崎 ▶ 課題を見つけて自分で解決するような行動ができることが主体性だと思うので、社会に出てから必要な力。自分で動けない生徒には、最初の一步はソツソツ押ししたり試行錯誤しながらやっている。

多賀 ▶ 昔卒業生から「授業は面白かったけど、何だったっけ？」と言われ、授業が社会につながっていなかったことを反省。今は自分の考えを表現できる授業をしている。二人の話を聞いて、主体性のキーワードは「動く」かな？



逆に、ご自身が「動けない」のはどんなとき？

ファシリテーターの意図

…… 安易に合意形成されそうなき、それを阻んで再度考えてもらうことがあります。例えば「動く」のは人ごとなら言えるけれど、自分のことでも果たしてそうなのか、逆説的に聞いてみました。

多賀先生からの問いに自分の経験
を振り返る

尾崎 ▶ ことが大きすぎて何から着手していいかわからないとき。ある講演で「行動の意味を考えないと、何回繰り返しても身につかない」と聞いたとき腑に落ちて、動かなければと強く思った。生徒にもさまざまな取組の意味を考えられるようにしているつもり。

多賀 ▶ 「意味を考える」は大事。活動に魂や軸がないとやっただけになる。それは「自分ごと化」することだと思う。まさに自分にも生徒にも大事なこと。

橋口 ▶ 自分ごと化してないと「やった」ではなく「やらされた」になりますよね。行動の意味を感じるには成功体験を積むことが効果的だと思う。部活ではよくあるが、授業では…

多賀 ▶ 授業の成功体験から生徒が行動の意味を考えたり、次もがんばろうという体験につながった経験はありますか？

尾崎 ▶ ……（自身の経験を振り返り思考しつつ、しばらく沈黙）
橋口 ▶ ……（自身の経験を振り返り思考しつつ、しばらく沈黙）



尾崎先生が、行動の意味を考えるようになってから、
生徒に対してやってみたことは？

ファシリテーターの意図

…… 沈黙が続いたので、多賀先生の問いを考えやすいように、既に出た話題から具体的に聞いてみました。

尾崎先生の言葉を素材に、揺さ
ぶりをかけるファシリテーター

尾崎 ▶ 生徒が「あ、そうだな」とか「やらなきゃ」と感じる表現の工夫をしている。志望理由や学習に真剣に取り組んでほしくて「今がんばることは進路の選択肢を増やすことになる。レストランに行って、使えるお金が500円と3000円だと選択肢が違よね」など。



いろんな働きかけはあると思いますが、例えば
皆さん自身は危機感をあおるやり方で火がつかますか？

ファシリテーターの意図

…… 先生たちの行動の真意を言葉に出してほしくて、あえて揺さぶりをかけた聞き方をしました。



対立を乗り越え、新たな価値を創造する「対話」

Report 新たな考えを生み出す対話とは？

揺さぶりに対し再度、行動の背景を振り返る先生たち

尾崎 ▶ 見守ることが大事だけれど、それだけでは動かない生徒もいる。動き出せば面白さや意味を感じられることもあるので、そのきっかけになれば。あくまでもそのための試行錯誤のひとつ。

橋口 ▶ 時と場合、生徒によって違う。刺さる生徒もいればそうでない生徒もいる。

【グループセッションから全体に戻り、個人での内省】

一旦、全体に戻り、ここまでの対話について個々で内省。「ここまでは、自分の中にあったものを場に出している状態。ここからは、今感じ始めたことを場にポツンポツンと出す。そんなこともトライしたい」と和泉さんから伝えられ、再びグループに戻っての対話を再開。



ここまでの対話で気持ちが動いた瞬間は？

ファシリテーターの意図

…… 内省タイムにお話したように、今感じ始めたことを聞いてみました。

「自分ごと化」で意見がまとまりそうだったが…

橋口 尾崎 多賀 ▶ 「自分ごと化」がみんなの共通の認識だったこと。



皆さんはどういうときに「自分ごと化」できますか？

ファシリテーターの意図

…… 『自分ごと化』はパターン化された言葉で、実はみんなが違う意味で捉えていることが往々にしてある言葉。それぞれがどう解釈しているかを明らかにするために意味を分解してもらおうと思いました。

それぞれに異なる「自分ごと化」の意味を共有していく

橋口 ▶ ビジョンが見えてるとき。

尾崎 ▶ それをやったらいき方向に動くと、意味を感じられるとき。

多賀 ▶ 自分がつながっているかどうか。例えば地域研究で、その地域の輪に自分が入っているかどうか。

フェーズ

2

自分たちの行動の意味づけ、やりたいことにまで発展

ファシリテーターが手を放すことで、生徒の主体性を軸にこのメンバーと話したいことがあふれ出し、日頃の学校活動の意味がつながり、次にやりたいことまで出てきたフェーズ。



創造的対話は自然になるものなので、無理に創造的にしようとしなくても大丈夫です。このメンバーで話すことはもうないかもしれない。だとしたら残りの時間で何を話したいですか？ 皆さんで話してみてください。

ファシリテーターの意図

…… ここまでお互いの考えや失敗経験も含めて相互理解を重ねてきたので、後はこのメンバーで何を生み出したいかは参加者に委ねようと、思い切って手を放しました。

対話のピッチが加速、普段やっている実践に対し、次々と新しい意味づけが生まれる

橋口 ▶ 自分が「自分ごと化」できたのは「誰かのため」と思ったとき。

尾崎 ▶ 教員ばかりがファシリテーターをやるのではなく、授業でもできる子がつまづいている子を助けるなど、生徒同士で助け合ってやることも自分ごと化になりそう。

多賀 ▶ 私はやっぱり「つながり」がキーだと思う。「誰かのため」「生徒同士」も「つながり」を感じる。つながりが機動力になりまわりの自分ごと化にも影響を与えて高め合える。それが自己有用感になっていくのでは。

橋口 ▶ あとは「場づくり」。先輩全員が後輩全員に体験談を話す場をつくって成長した学校事例がある。

尾崎 ▶ 先輩講話は話す本人も振り返るので、お互いにとって有効。

多賀 ▶ 「振り返り」も自分ごと化に必要。キャリア・パスポートもそれにつながっている。社会に出ても振り返りが有効だと認識できる。

尾崎 ▶ 本校では手帳を使って目標設定、反省をしている。振り返りの見える化が大事。

橋口 ▶ 市販の「3年手帳」を生徒に書いてもらったら、去年の自分からの成長を比較できるかも。

多賀 ▶ 主体性とは何かを考えながら、次年度にやるべきことや、やりたいことのヒントが見えてきた。対話って面白い！もっと皆さんと話したい。

全体振り返りへ

「創造的対話」の道程に正解はない。 対話を創っていくのは参加者一人ひとり。

「高校で育むべき主体性」という答えがひとつではない問いに向かつて対話に臨んでいった先生たち。

「踊る」というキーワードをきっかけに、「設定がある中での取組は、本当の主体性と言えるのか？」というモヤモヤから脱し、それに触発された新たな考え方を生み出したAグループ。先輩講話、キャリア・パスポート、振り返りなどの日々の学校活動と主体性との結びつきに気づき、今までの実践に対する新たな意味づけや、これからやりたいことへ展開していったBグループ。

2つのグループはまったく異なる対話の課程を辿ったが、共に今日ここに集っている参加者とファシリテーターでなければなし得なかった「創造的対話」を生み出したのだ。対話の内容やプロセスに正解はない。その場にいる全員で創っていけばよいのだ。それを参加者の先生方も体感していた。

ファシリテーターの2人は異なる個性をもち、声のかけ方も違っていたが、共通していたのは場の把握と介入のタイミングに注力していたことだ。特に前半は、AとBで介入のレベルは異なっていたものの、両グループとも先生方

が自分の体験や考えを場に出していく「探究的対話」に相当の時間を割いた。「創造的対話」に欠かせない関係性をつくるためには、ある程度時間をかけてもじっくりと場づくりをすることが肝心。その際、ファシリテーターは「リードではなく、支援」に徹し、参加者自身が話したいことを話して場をつくっていくという姿勢が強くうかがえた。

一方で、学校では自分たちがファシリテーターとして対話を実施することを想定して、難しさも感じていた先生たち。「教員同士の対話の場を、いかに安心・安全の場にできるか？」といった質問が出た。ファシリテーターたちはそれに対する明確な答えはないとしながらも、和泉さんはこう語った。「対話は実は勇気がいるコミュニケーション。みんなでつくる場ですが、自分の想いを本音で語る最初の一人のふるまいと存在で場が動き出し、連鎖していきます。一度創造的対話を体験・実践できた人はまたできます。今日それを体験したことで、今後は皆さんが学校でも最初の一人になれるのではないのでしょうか」

／ ファシリテーター's eye ／

社会通念から一旦解放されて
自分の想いを外に出してほしい

今回に限らず学校関係者の方々に感じるのは、お立場上、規範に囚われがちというところで、それが対話にも影響します。

このWSで「主体性とは何か」に対して、「自分ごと化」という言葉が図らずも両グループともに出てきたのは、日頃から使い慣れたパターン化された言葉だからです。それは危険で、みんなが納得しやすいからこそ、新しい概念は生まれにくい。ため、社会通念上では正解と思われることをアンライン（一旦捨てる）したり、リフレミ



渡邊 尊

ングする必要があります。そこで、和泉も私も「自身にとっての自分ごと化の体験は？」など、各先生がその言葉をどう捉えているかという問いを出しました。

また、Aグループでは「踊らされている」という想いを斉藤先生が発したとき、パターン化されていない新しいその言葉の意味づけをみんなで考え、創り出すことができるようになりました。こんなふうに、対話の際は、社会通念から一旦解放されて考えることを愉しんでほしいと思います。

創造的対話を望む衝動を
どう引き出していけるか

ファシリテーターにも正解はなく、自身の個性や参加者の個性、場の状況は常に異なるため、その場に応じた支援や問いの発し方が必要になります。今回はチェックインでの先生方の状況を見て、渡邊も私も介入方法を考え、場の流れを見ながら介入度合いを変えていきました。

対話の進行者としても、発言のハードルを下げるために自らヒロ役になってみたり、自己開示したり、傾聴したり、ゆさぶりをかけたり、時にはアイデアを提供するな



和泉 和生

ど、ファシリテーターにはさまざまな役割がありますが、最終的には、参加者にそのすべての役割を移していけることが理想です。

先生方に意識してもらいたかったのは、場は自分のふるまいでできていること。Bグループは後半でそのことを再認識し、先生たちは創造的対話に流れ込んでいきました。創造的対話をしたと思う人にはその衝動があります。それをおもちの参加者の先生方なら、生徒さんのもつ衝動もきつと引き出せるのではないのでしょうか。



<先生方のリフレクションから>

研修で得た気づき&これからやってみたい取組



Aグループ



翌日にさっそく、教員間で対話を実行 「対話の力」を改めて実感

斉藤友昭先生 相洋中・高校(神奈川・私立)

主体性について対話を重ねていったことで、「自分ごと」「身近にすること」「チャレンジ精神」と、三人三様の言葉で言語化することができるのだとわかりました。そして、それぞれが納得感の高い自分なりの解を得ることができて、とてもスッキリしました。一方で、同じような気持ちで対話をしてきても、紡がれる解はそれぞれで異なることに驚きました。WSの翌日、さっそく勤務校で次年度の授業カリキュラムについて若手の同僚と創造的対話を意識して、相手に寄り添って気持ちを引き出す対話を、少し時間をかけてしてみました。すると彼自身から、私が考えていた最適解に近い内容が出てくるという驚きの展開で、私たちなりの納得解を創ることができ、「対話の力」の大きさを実感しました。



生徒の創造的対話につながる 「問い」を意識していきたい

辻 晃子先生 大阪高校(大阪・私立)

主体性について自由に語っていたときに、渡邊さんが対話のアティチュードを忘れかけていた我々に再度、「『私』を主語で語りましょう」という投げかけをされたことで、探究的対話が始まったように感じました。そうした軌道修正や問いを投げられることで、過去の体験の共有から、未来の話へと展開していくことが創造的な対話なのだと実感できました。頭の中はかなりのエネルギーを消費していましたが難しいことを共有する楽しさを知ったように感じています。私は入試広報として本校のオープンスクールを担当していますが、企画運営委員会やPR委員会の企画や内容は生徒が会議を行い、運営しています。そのなかで創造的対話につながる「問い」をさらに意識的にしていきたいです。



教職員での長期的な取組では 対話こそがなすべきこと

寺崎仁樹先生 愛光中学・高校(愛媛・私立)

当初は参加者同士の主体性に関する概念が違うなと感じ、「高校生に育むべき主体性」にもモヤモヤしていましたが、対話によってお互いの考えがだんだんと近づき、より明確に言語化できることを知りました。斉藤先生の体験談が、自分の体験と重なり、自身をメタ認知できたことも対話の効果です。学校ではLHRで対話をしてみたいですが、クラスで約10グループのファシリテーションをどうしたらいいか、教員の目の届く範囲での対話が可能か悩むところですが、しかし教職員との長期的な目的・視野に関しては対話こそがなすべきことだと感じました。立場の違う互いを理解し合おうとするには対話が必要だと思いますし、自分自身の姿勢も身につまされるものを感じています。

Bグループ



WS終了後から続く自分との対話 探究で対話を取り入れたい

尾崎恵子先生 三沢高校(青森・県立)

生徒の主体性について対話を深めていくなかで、今まで自分は「やらなければ」と思ってもらうことだと思っていましたが、「やりたい!」と思ってもらうことだと、自分自身のマインドセットが変わりました。また、和泉さんが絶妙なタイミングで我々に場を任せたことで、生徒の「自分ごと化」を話し合っていた自分自身が「他人ごと」だったと気づけたことも大きかったです。それも対話中ではなく振り返りで気づいたので、リフレクションの重要性も再認識しました。本当に多くの学びを得られ、WS参加以来自分との対話が続いています。学校では探究の時間に、対話を活用して、生徒自身がやりたい、と思える場づくりを心がけたいです。



生徒の腑に落ちる言葉で 問いを投げる重要性を改めて感じた

多賀秀徳先生 飯南高校(三重・県立)

「自分ごと化」というキーワードが出つつも、どうしたらそれができるのか考えていたときに、和泉さんから「自身にとっての自分ごと化は?」という問いが出ました。「『誰かのために』という部分があると自己有用感につながる」と橋口先生が答えたときにハッと私の思考が動き始めました。「貢献する」というワードはよく聞きますが、「誰かのために」という素朴な言葉の方が生徒にはわかりやすく響くのではないかと思ったからです。問いを投げかけられたり、投げたりを繰り返すなかで、徐々に考えが整理されてスッキリしていく気持ちになり、対話の重要性が身にしみました。「問いを投げる」ことは、教科授業のデザインでも重要なキモになってくると改めて感じています。



手を放し見守る勇気を再認識 生徒たちと早く対話したい!

橋口 嵩先生 熊本北高校(熊本・県立)

「なぜ自分ごと化できないことがあるのか?」という和泉さんの問いや、終盤で我々に場を任せたことにより、この対話自体で「自分ごと化」を体感させてくれたことが、「主体性」→「自分ごと化」→「自分たちで創りあげること」と、理解の深化につながりました。また、和泉さんのファシリテーションで、対話の環境を整えてからはあえて離れて見守る勇気をもつことの重要性を強く実感しました。対話は昨年度に生徒とやろうとしてコロナ禍で断念していたのですが、「私たちに宿題は必要か?」「私たちに本当に必要な校則とは?」など、生徒の興味があるテーマでぜひ実現させたいです。正解がないテーマについて生徒同士でとことん対話して、思考をぐるぐる回してもらいたいです。